



福井市自然史博物館

博物館だより

FUKUI CITY MUSEUM OF NATURAL HISTORY NEWSLETTER



Photo by Yuichi Hasegawa 2004.4.6 福井市八幡山

福井の自然史情報

メジロとサクラ

大雪だった冬が過ぎ去り、足羽山にも春がやってきました。

今年の足羽山のサクラは、大雪で枝が折れたり、3月末に再び寒くなったせいか、例年より花が少ないようでした。

メジロは足羽山で45年間ずっと観察され続けていますが、今年はどうでしょうか。



中面に詳しい解説があります。

福井市自然史博物館
第61回特別展

「越前の海、こよなく愛す」
鈴間愛作貝類
コレクション展

2006年
3/21(火)
~5/28(日)

写真キャプション:①世界最大の巻貝アラフラオオニシを手にした鈴間さん(1992年頃)②越前町左右海岸で採集する鈴間さん(1969年頃)③鈴間さんが越前町厨沖で発見した新種「スズマバイ」④特別会場⑤貝のクイズに挑戦してみよう



みなさんは何か「モノ」を集めたことがありますか？フィギュア、トレーディングカード、鉄道模型、切手…色々あるかもしれません。福井県越前町の鈴間愛作さん(84歳)は若い頃より貝に魅せられ、60年以上にわたって貝を集めてきました。浜を歩いたり、自ら海に潜ったり、そして時には漁船に同乗し、底びき網の中を探して多くの貝を集めました。その数なんと1万7千点以上。この膨大なコレクションは、まさしく日本海にすむ貝のデータベースをなしています。

このたび、鈴間さんのご厚意によりすべてのコレクションが当館に寄贈されたことを記念し、「越前の海、こよなく愛す—鈴間愛作貝類コレクション展」と題して、選りすぐりのさまざまな貝を展示しています。

図鑑を塗りかえる！

図鑑の中で、「〇〇から△△に分布」という説明を読んだことがありませんか。これは全て標本情報を元に書いています。今回展示している「アブラキヌタレガイ」、

「カネコヒタチオビ」、「テングシャクシ」は、鈴間さんが日本海で発見するまでは、太平洋にしか分布していないと言われていました。しかし鈴間さんが日本海で発見したことにより、その後の図鑑の説明もかわったのです。

新種発見！

博物館には、「これは新種ではないですか？」と言って、標本をもって尋ねて来られる方がよくいます。私たち学芸員も毎回わくわくしながら調べるのですが、そう簡単に新種の発見とはなりません。中でも、貝類は大勢の人がすでに調べていて、なかなか新種を見つけるということはありません。しかし、鈴間さんは多くの貝を収集することにより、これは何か違うという目を養っていました。その名もずばり、鈴間さんの名前のついた「スズマバイ」は、鈴間さんが越前町厨沖で見つけた新種です。このほか鈴間さんによって発見された「タケノコバイ」や、新亜種の「スズマヒメカブトボラ」も展示しています。

記録するって大事！

鈴間さんの収集活動は、ひとつの趣味としてとらえればそれまでですが、このような標本資料は自然史学を進める上で欠かせないものです。「カワシンジュガイ」は福井県では福井市の大味川だけにすんでいましたが、30年以上見つかっていません。そのため、すでに福井県では絶滅したと考えられています。このカワシンジュガイをはじめ、現在はレッドデータブックに載ることになってしまった貝類も展示しています。

個人のコレクションといえども、学術的にも大きく貢献した鈴間コレクション。ぜひ一度ご観覧ください。キッズのためには楽しく展示を見ることが出来る貝のクイズも用意しています。そして、みなさんも貝の多様性とその美しさ、生態の不思議さにどっぷりとつかってください。(安曾)

野鳥たちの不思議

中林 喜悦 市環境アドバイザー・当館協力員



サンコウチョウ（南越前町 杣山）
photo by Yuichi Hasegawa

鳥と云う動物を一言で説明すれば、飛翔生活を高度に発達させた高等脊椎性動物で、恒温性で体は羽毛につつまれ、卵生です。飛翔するために体の様々な部分の特殊化がなされていて、前足は翼に進化させ、その翼を羽ばたかせる為に胸筋を異常に発達させました。また、大量にエネルギーを供給できる心臓とガス交換率の高い呼吸器(肺)を持っています。運動制御をする為に小脳と視覚聴覚を発達させており、眼が大きく出来ているのも特徴です。さらに、鳥は頭を軽くするために歯を無くし、くちばしに変化させた不思議な動物でもあります。現生の鳥の種数は世界で9,700～9,900種にもなるといわれています。

鳥は種類によって、姿、形、色も実に千差万別です。特に、野鳥は人間と同じく色覚があるため、その色は人間の美的感覚を刺激し、古今東西から鳥をモチーフにした絵画や詩歌、物語の作品が数多く残されています。鳥の美しい羽が人の興味を引き、装飾用に乱獲されるという悲劇もありました。このように鳥は常に人間の身近な環境で暮らしているうえ、一部の夜行性グループを除き人と同じように昼間活動する種が大部分のためとても目に付きやすい生物です。人間側からすると、毎日鳥の姿形を見て、自然の豊かさを知るバロメーターに利用していることもあるかもしれません。しかし、野鳥たちの美しい羽色、姿、声はなにも人間を喜ばせるために発達させたものではありません。彼らは常に天敵や危険に囲まれた自然界の中で生き延びるには目立たない方が有利なのです。しかし、自分たちの子孫を残すためには、ある時期にはどうしても目立たなければならない必要が生じるのです。例えば、カモ類の雄は繁殖期を迎えると雌の気を引くために目立つ色合の羽に変わるのです。目立つことの危険を知りながらも、雌に選ばれることの方が種の存続に有利だからです。

先にも述べた通り野鳥は視覚と聴覚を発達させた動物で、特に小鳥類たちの多

くは独特の節まわしで優雅に鳴くさえずりをするだけでもわかるように、彼らは自分の縄張りを宣言し雌を呼び込む声になるのです。初夏の森林や草原で早朝、最高潮に達する壮大なコーラスは力強く生命の息吹を感じさせるものです。

鳥などが定期的に空を飛んで、季節によって生息地を変えることを鳥の渡りと言っています。野鳥観察記録からこの渡りは留鳥、漂鳥、夏鳥、冬鳥、旅鳥、迷鳥の6区分などで解説しています。春の訪れとともに沢山の夏鳥が日本に渡って来ます。ツバメはあの小さな体で東南アジアから自分の力だけでやってきます。秘められた不思議な力を感じます。渡りのメカニズムや、小鳥が大海をどうして越えて来るのかと考えると感心するばかり、神秘的な自然界の営みが広がってまいります。

このように野鳥たちは、くらしの中で生きるための様々な様子を観せてくれます。求愛や子育て、繁殖、羽づくろい、採食など無関心でいられない行動には謎が深まるばかり。また、スズメくらいの大きさのシジュウカラ1羽が生きて行くと

めに食べる昆虫の量は1年間でおよそ12万5千匹必要だというデータがあります。これは、それだけの虫を養う植物があつてこそシジュウカラがくらしていけるのです。

1羽の野鳥から自然全体が見えてきます。鳥も人間も地球に生きる仲間として、自然界の驚異や感動にふれた私たち自身の体験談をご紹介しますことで、「野鳥を通し自然に親しむ人、自然を知り守る人」を増やしたいと思います。

※中林さんが45年間に渡って観察した、足羽山の野鳥の記録を掲載します。このような観察記録のおかげで自然の変遷が見えてきます。(安曾)

足羽山で確認された野鳥 ～毎年5月10日頃の調査から～

年代	1955	1974	1985	1990	年代	1955	1974	1985	1990	年代	1955	1974	1985	1990
種別	1973	1984	1989	1999	種別	1973	1984	1989	1999	種別	1973	1984	1989	1999
アトリ	○				オオルリ		○	○	○	カワラヒワ	○	○	○	○
イスカ	○				キジバト		○	○	○	コゲラ	○	○	○	○
エゾビタキ	○				キビタキ		○	○	○	コサメビタキ	○	○	○	○
キクイタダキ	○				サシバ		○	○	○	シメ	○	○	○	○
ゴイサギ	○				サンコウチョウ		○	○	○	スズメ	○	○	○	○
ジョウビタキ	○				シジュウカラ		○	○	○	センダイムシクイ	○	○	○	○
チゴモズ	○				ツバメ		○	○	○	ハシブトガラス	○	○	○	○
キレンジャク	○				トビ		○	○	○	ハシボソガラス	○	○	○	○
マミジロ	○				ホオジロ		○	○	○	ムクドリ	○	○	○	○
ミソサザイ	○				ヤブサメ		○	○	○	メジロ	○	○	○	○
カッコウ	○	○			アマツバメ			○		ヤマガラ	○	○	○	○
マヒワ	○	○			イワツバメ			○		ヒレンジャク	○		○	
ルリビタキ	○	○			ノスリ			○		アオサギ	○	○		○
アオバト	○				ハリオアマツバメ			○		キジ	○	○		○
コガラ	○				カルガモ			○	○	エゾクイムシ	○			○
サメビタキ	○				ヒヨドリ			○	○	オオタカ	○			○
ツグミ		○			ウソ				○	ビンズイ	○			○
ハイタカ		○			カケス				○	ベニマシコ	○			○
マミチャジナイ		○			コイカル				○	アオジ		○		○
コシアカツバメ		○	○		コマドリ				○	アカハラ		○		○
コルリ		○	○		ノゴマ				○	サンショウクイ		○		○
モズ		○	○		イカル	○	○	○	○	シロハラ		○		○
ウグイス		○	○	○	エナガ	○	○	○	○	ヒガラ		○		○

福井県沿岸でトウカムリ科の ウラシマガイ類の打上げが多い所は…

福岡 修（日本貝類学会会員）

福井県沿岸でウラシマガイ類が打上がる浜は多くはありませんが、三国町新保の浜から海水浴場のサンセットビーチには時折打上がります。

そこから更に北へ向かい浜地から波松の中間地点、芝政ワールドの下あたりは特に多いようです。

2006年1月15日にいつものポイントを探したところ、300mぐらいの間に下記のウラシマガイ類を多く拾うことができました(破片も1個とする)。

ウラシマガイ *Semicassis bisulcata persimilis* 71個

カズラガイ *Phalium (Bezoardicella) flammiferum* 10個

タイコガイ *Phalium bandatum* 3個



採集したウラシマガイ

他には、下記のものも見られました。

アオイガイ、トウイトガイ、ヒメイトマキヒタチオビ、ヤツシロガイ、アラレガイ、フネガイ科の貝、イタヤガイ、ツメタガイ、コタマガイ、ムラサキイガイ、アズマニシキ、マツヤマワスレ、ベンケイガイ

新 任 職 員 の 紹 介



学芸員(植物担当)
中村 幸世 なかむら さちよ

育児休暇が終わり、4月から自然史博物館に復帰させていただきました。美しい桜に囲まれて、足羽山に戻ってきたなあと実感しています。これからまた市民の皆様と一緒に、植物の面白さや不思議などを身近なところから勉強していきたいと思います。よろしくお願いいたします。



学芸員(非常勤・動物担当)
内藤 由香子 ないとう ゆかこ

普段めったに目にすることはない小さなモグラやネズミのことを多くの人に知ってもらい、彼らを身近に感じてもらえればと思っています。1年という短い間ですが、足羽山の小型哺乳類について調査をし、その結果をみなさんに紹介していく予定です。どうぞよろしくお願いいたします。

《あとがき》

博物館前の雪かきが大変だった今年の冬が終わり、足羽山はすっかり春になりました。これからは、昆虫や鳥など自然観察に絶好の季節ですね。博物館でも常設展示のリニューアルに向けて、足羽山での調査を始める予定です。足羽山について面白そうなことがあればぜひ博物館にお知らせください。(安曾)



《交通案内》

【電車】
福井鉄道福武線 公園口駅

【バス】
京福バス赤十字病院線(72号系統) 公園下バス停
コミュニティバスすまいる:西ルート(足羽・照手方面)
愛宕坂バス停 いずれも徒歩10分です。

【徒歩】
JR福井駅から徒歩30分

《ご利用案内》

開館時間 ●午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休 館 日 ●月曜日(祝日は開館)、国民の祝日の翌日、
年末年始
入 館 料 ●おとな100円(20名以上の団体は半額)

「The Bumblebee Queen」

April Pulley Sayre,
Patricia J. Wynne/著
Charlesbridge
2005年発行
価 格 14.95USD
ISBN 1-57091-362-5



「マルハナバチの謎(上・下)」

ヨシフ・ハリフマン/著
理論社 1988年発行
価 格 各2,100円
ISBN 4-652-02713-3
ISBN 4-652-02714-1



皆さん、マルハナバチというハチを見たことはないでしょうか?クマバチみたいない体型ですが、全身毛むくじゃらでこころとしたハチです。蜜や花粉を集めるときに、花の種類を覚え、同じ種類の花に続けて訪れるので、植物にとっては花粉を同じ種類の花に運んでくれる、とてもよいパートナーです。福井でもよくみかけるこのマルハナバチの暮らしについて、知ることのできる本を2つ紹介します。

1つめは「The Bumblebee Queen」。英語の絵本ですが、絵を見ているだけで冬眠から覚めた女王の一生がよくわかります。2つめは「マルハナバチの謎(上・下)」。

ヨシフ・ハリフマン氏が、社会性昆虫の面白さをわかりやすくまとめたシリーズの一つです。どちらも、一般の本屋さんではなかなか手に入らないものですが、博物館の普及図書コーナーで利用できます。ぜひ手に取ってみてください!(佐藤)



本誌は再生紙を使用しています。

